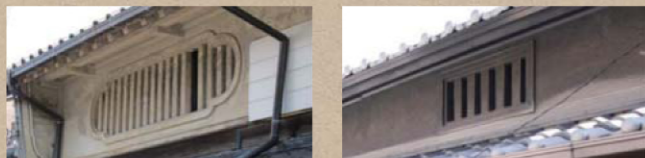


まち歩きに必見！町家・町なみ豆知識

町家・町なみの基本的な用語を解説しています。まち歩きの時、地図を見ながら参照していただくと役に立ちます。

「虫籠窓(むしかご)」



その形状が虫籠(むしかご)に似ていることから名付けられたとも言われている。漆喰で塗り込められているものが多く、その枠形状も四角のものもあれば、角が丸まっている木瓜形(もっこうがた)のものもある。

「格子」



棧の框(かまち)と縦横に組んだ組子(くみこ)で構成され、組子の幅の広い・狭いなど、多くのデザインがある。建物内部への採光と通風を確保しつつ、外部からの進入と視界を制限できる効果がある。

「駒寄(こまよせ)」「矢来(やらい)」



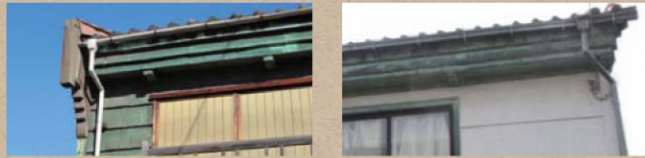
町家に多く用いられている「格子」は、正面から顔を近づければ目が覗けてしまうため、これを避けるための足止めとして設けられている。

「卯建(うだつ)」「袖壁」



本来、隣家からの類焼を防ぐ目的でつくられるものだが、中には、装飾的な意味合いが強いものもあり、瓦をせたデザインの卯建(うだつ)も見られる。

「箱軒(はこき)」



2階の軒下を箱段状にし、防火のために銅板で覆ったもの。

「つし(厨子)二階」

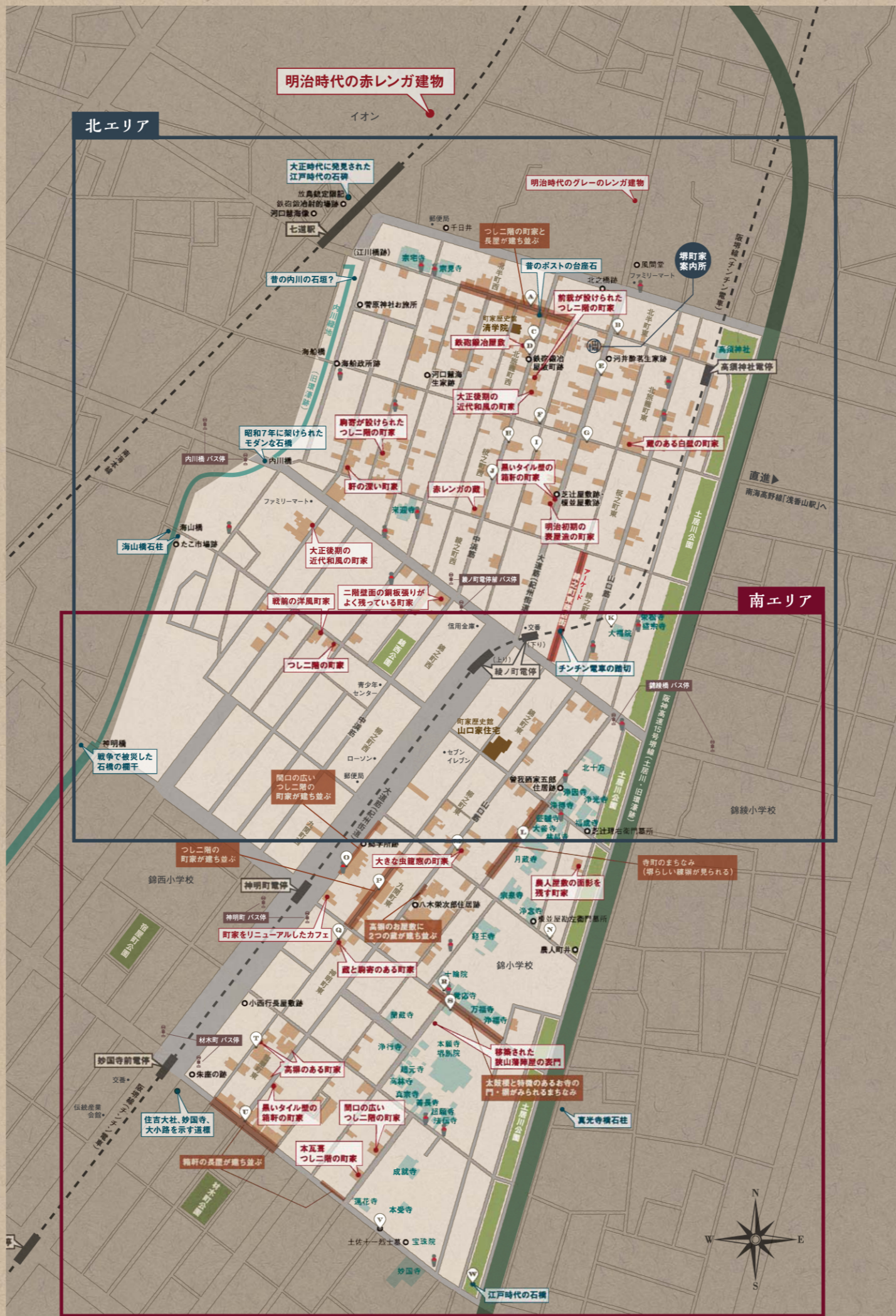


主に江戸から明治にかけて建てられた古い様式で、中二階(ちゅうにかい)と呼ばれることもある。二階の天井が低く、「虫籠窓(むしかご)」があるのが特徴で、主に屋根裏や物置き部屋として利用されていた。

「総二階(高二階)」



つし(厨子)二階の町家と比べて、二階の天井が高くなり、二階が居住用として使われている。時代の流れで、漆喰が塗り込められた虫籠窓ではなく、ガラスの窓に変化している様子が見受けられる。



堺環濠都市北部地区町なみ再生協議会



まち歩き
のヒント
を
この
地図
から
探
し
出
し
ま
い
ま
せ
う

堺環濠都市北部地区について

自由都市、自治都市として名高い中世の堺(中世の環濠都市)は、江戸時代初めの1615年(慶長20年・元和元年)、大坂夏の陣の際に、豊臣方の焼き討ちにより灰燼に帰しました。そして、その後、堺は徳川幕府の直轄領となり、新たに三方に濠(いわゆる「土居川」)が掘られ、基盤目状の街路や短冊形の街区等も整備されて(元和の町割り)、新しい近世の環濠都市に生まれ変わりました。この近世の環濠都市は、その後、近代へと引き継がれて来ましたが、1945年(昭和20年)、第2次世界大戦時の堺大空襲のため、大部分が焼失しました。しかし、その北部地区は、幸運にも戦火を免れたため、現在も江戸時代から戦前に建てられた町家などの貴重な歴史的建造物が多く残されています。

— 堺環濠都市北部地区町なみ再生協議会とは —
この地区の江戸時代から続く貴重な歴史的町なみを保存・再生・活用するために設立された民間の団体で、堺市と協力しながら、「江戸時代の町割りを活かした環(わ)をはぐむまちなみ」を標語として活動しています。

このマップについて

このマップは、町家や町なみを見て歩くための地図です。そのため普通の地図とはひと味違います。町家や町なみを楽しむためのユニークな視点を提供します。さあ、みなさん、一緒に歩きましょう！



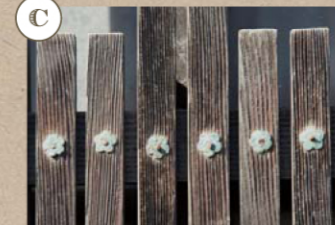
地区の北エリアは、鉄砲鍛冶屋敷に象徴されるように、かつては職人の町でした。包丁の生産も盛んであり、商家も多く活気に満ちていました。現在もその面影をあちこちで偲ぶことができます。



漆喰をコテで仕上げたコテ絵の打ち出の小槌。



入母屋の棟に鎮座する恵比寿さん。手前の瓦は波形か。



格子を止める釘の飾り金具。



瓦には、時々、製造者や製造所を示す刻印が見られる。



旗竿を立てるための、渦巻きの金物が印象的。



袖壁には、ヤマサの屋号。



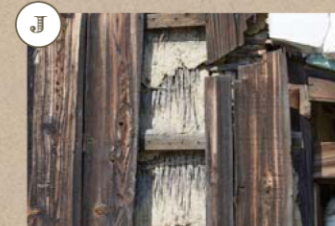
入母屋が特徴的な町家。本瓦葺の瓦には三つ巴の紋がある。



袖壁の透かし彫りのレリーフが印象的。



I-1.2 葺の棟の両端に鎮座する。1が大黒さんで、2が恵比寿さん。大黒が北向きで、恵比寿が南向き。ちなみに、Bの恵比寿も南向き。



葺(みの)壁。雨具の葺のように藁を編んで並べている。今ではほとんど見られない。



寺院のお堂の屋根の真ん中にある飾り物の「宝珠」。